慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | ドゥラ・エウロポスのミトラス神殿と初期ミトラス教(三) |
| Sub Title | A survey of the materials from the Mithraeum of Dura-Europos (III) |
| Author | 小川, 英雄(Ogawa, Hideo) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1973 |
| Jtitle | 史学 (The historical science). Vol.45, No.3 (1973. 5) ,p.69(309)- 90(330) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 論文 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19730500-0069 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ドゥラ・エウロポスのミトラス神殿と初期ミトラス教（三）

小川英雄

## 1. 序

前回[1]までに述べたことは、次の通りである。ドゥラ・エウロポスの発掘の際に発見されたミトラス神殿は、第一にローマ帝国領オリエント属州で発見された唯一のミトラス神殿であり、第二に年代の知られるミトラス神殿としては最も古いものの一つであり、第三に考古学的検討に耐えられる発掘報告書の出ている数少いミトラス神殿の一つである。もし、ミトラス教がヘレニスティク・ローマ時代のオリエントで、マズダ教を基底として成立し、それがローマ帝国全体に広がったとすれば、ドゥラ・エウロポスのミトラス神殿の上記のような史料的持性は、ミトラス教の成立期に関する困難な問題に光を投じてくれるであろう。特に、ミトラス教が「マズダ教のローマ的形態」(Cumont) であるとすれば、ローマ帝国とパルティア帝国の境界線上にあり、ミトラス神殿が最初に建立された当時、きわめて緊迫した状態にあったドゥラ・エウロポスには、ローマ的ミトラス神信仰の形成過程を示すものが何か見出されてもよいであろう。ドゥラ・エウロポスの当時の軍事的・文化的・社会的状況も、ミトラス神殿の歴史も、このような問題がそこにあり得たことを明らかに示しているように思われる。

しかし、ローマ帝国内ミトラス教の他の初期史料の検討なしには、ドゥラ・エウロポスの史料の真の価値を知ることは

出来ない。ミトラス教史料が急激に増大するコモドゥス帝の治世（176～192）までのローマ帝国各地に散在するミトラス教史料を概観しそこから看取される初期ミトラス教像とドゥラ・エウロポスの初期ミトラス教とを比較するならば、発生期のミトラス教の実態を把握することが出来よう。

且し、第二篇の冒頭に書いた通り[2]、ドゥラ・エウロポスのミトラス神殿の史料は目下刊行が遅れているので、不用意な結論はつゝしまなくてはならないことは勿論である[3]。

## 2. 初期ミトラス教の性格

既に概観したように、コモドゥス帝の死に至るまでの約五〇年間のミトラス教史料のうち、年代を確定出来るものは二〇点余りであり、その上、コモドゥス帝の治世に属するものが四分の三以上を占めている。史料の少なさと著しく分散した状態、それとローマ帝国の広大さを考えに入れるならば、この際地域的特色を問題にするのは不可能である[4]。そのような方法は初期のミトラス教を考察する場合は、却って有害でさえある。それ故、これ等の史料に現われる持性は地域的特性としてではなく形成期ミトラス教の性格を示すものとして年代中心に考察するのがよい。

信者の性格については、第一に、しばしば主張されているような[5]軍団単位の移動とミトラス教の伝播とを結びつけることは初期ミトラス教に関する限り不可能である。第八軍団アウグスタ（A. D. 146）、第七軍団ゲミナ（155）、第三軍団アウグスタと第一三軍団ゲミナ（183—185）、第三〇軍団ウルピア・ヴィクトリクスと第二二軍団プリミゲニア・ピア・フィデリスなどが史料に現われるが、これ等の軍団の二世紀後半における動きには、ミトラス教の流布と一致させるべき必然性を見出しうるものが存在しない。もし、何かそこに重要な意味を見出し得るとすれば、それはミトラス教の起源が確定出来た後のことである。単にオリエントやドナウ川流域に転戦した経験があるというだけでは、ミトラス教流布の歴史に何の方向性も与えることが出来ない。

但し、第三軍団アウグスタと第一三軍団ゲミナのそれぞれの司令長官であったM・V・マクシミアヌスとC・C・サビヌスの間には、ドナウ川流域と北アフリカをつなぐ信仰の糸が存在していた。彼等は初期ミトラス教史上でコモドウス帝を除くと最も身分が高い二人であり、ミトラス教に入信した皇帝の下で非常に影響力が強かったと思われる。しかし、問題はミトラス教がこのように体制的宗教になる前の信徒層である。

初期ミトラス教の信徒は大多数が東方系の人々であり、社会的身分は低かった。例えば、奴隷出身者でもなれる下級の役人（一五七年のフェリックス、一七二年のアプロニアヌス、一八三年のM.ウルピウスとマクシムス）や軍団所属の軍人でも百人隊長（一四八年のD.セッリウス・プロクリアヌス、一八九年のM.J.マルティウス）や食料補給係（一五五九年のM.V.セクンドゥス）などであり、その他の信徒は全くの民間人へディクルス・アヴィトウス、レアティヌス、ルキウス・アウレリウス・セヴェルス、マクシムスの息子たち、ヘラクレス、ヴィタリス、ニコメス、及び三人の農園管理人ピュラデス、アルキムス、ヴィクトル）であり、はっきりと奴隷であると記されているヘルメテスや解放奴隷と記されているカーユス・ユリウス・ヴィクトリヌスなどもいる。その上、後述する位階「父」や神官職にあるミトラス教内の幹部は東方系の民間人である。年代的にみても、民間人の信徒は初期ミトラス教史の各時期にひろく分布している。彼等は奴隷身分のまゝ東方から来たと考えられるが、故郷も移住の理由も分らない。又、移住先での職業も農園管理人の他は不明である。多分、多くは商人であったろう。いずれにしても、ミトラス教の伝導者は軍団単位で動く正規の軍人であったというよりも、二世紀の前半から中葉にかけて、オリエント属州から移って来た東方人であったといえよう。

次に信徒の組織についての史料をみると、そこには二つの種類が見られる。一つはミトラス教の七つの位階の第一位「父」Pater であり、もう一つは聖職者である。位階について特記すべき事実は、七つの位階のうち第一位の「父」のみコンスタントに現われ（A.D.一五五、一七二、一八一、一八四、一九〇）他の六つは全く欠けていることである。これ

が何を意味するかはたやすく知ることが出来ない。とりわけ、既に一五五年に「父の父」へディクルスがいたという事実は、信者の指導者としての「父」がいかに大切であり、又指導者の多くが「父」を称し、その仲間の中で更に上位の者が最初期から存在したことを示している。他方、聖職者には二つの称号があった。即ち、一つは antistes、他は sacerdos である。前者は一六二年と一九〇年に現われる。A. D. 一六二年のものは antistes huius loci と書かれているので、antistes は神殿と直接に結びついていたようである。しかし、二つ以上の神殿でのかけもちも可能であった。この地位は又、一九〇年の碑文では位階「父」の C. V. ヘラクレスによって占められている。従って、「父」は聖職者にふさわしい段階まで昇った信徒であろう。恐らく、「父」であり antistes である人物は、その属する神殿で絶大な権威を保っていたであろう。しかし、聖職者にならず、「父の父」にまで昇る人もいた。他方、すでに一六〇年代から sacerdos と称される聖職者も姿を現わす（他に A. D. 一五四又は一七七、一八三、一八四、一九〇、一九四）。一九〇年の場合のように、一つの神殿に二人の sacerdos がいたこともある。従って、antistes よりも数が多かったにちがいない。又この神殿では、一人の antistes と二人の sacerdotes が同時に存在した可能性がある。二つの聖職位の関係はこれ等の史料だけでは決定出来ない。多分、antistes の方が精神的に上位にあり、同時に儀式の上でも上位にあったであろう。

次に、儀式用語を考察しよう。碑文はすべて奉納物をさし出すためのものである。その際に、碑文中に現われた限りでいかなる手続きがとられたのか、が問題となる。R. Duthoy は最近、タウロボリウムの儀式用語を分析し、年代に従って変化があることをつきとめ更にその変化は宗教思想の発展をも反映しているという結論に到達した。[6] 初期ミトラス教の碑文に関する限りは、奉納行為を示す動詞に年順の変化があるとは認められない。動詞としては五種、即ち curo (curavit, curante), dedico (dedicantum, dedicavit), dedo (dedit), facio (fecit), pono (ponendam, posuit, posita), が使われている。これ等に年代的に意味のある変化は認められない。ずれも奉納行為を示すが、その儀式の奉納者と並ん

で、執行者が記されている場合がある（合計八件）。それによると、執行者には位階「父」のものと、sacerdosによって呼ばれる聖職者とがある。[7] Antistes は現われない。動詞は奉納の種類によって使いわけられていると思われるが、「父」も sacerdos も dedico や pono で表わされる儀式に関与しているので、奉納の種類は執行者を限定してはいない。しかし、儀式の中での役割には差があったにちがいない。なぜなら、一八三年の碑文の sacerdos の役目は asstans（助力）であるのに対し、一八一年と一八四年の碑文の「父」の役目は praesidens（又は prosidens, 司式）である。従って、奉納儀式の真の執行者は「父」であり、sacerdos はそれを補佐する儀式の専門家であったろう。そして、聖職者にして司式する資格があるのは antistes であったろう。

初期ミトラス教の史料は殆んど全ローマ帝国に分布するにもかゝわらず、「父」や sacerdos の儀式執行者としての役目を伝えるのは、スペインのメリダ（一五五年）の一件を除くと、他はすべてイタリアのローマ（六件）とネルサエ（一件）の碑文である。多分、他の地域（ゲルマニア、パンノニア、北アフリカ、ダキアなど）では、初期ミトラス教の時代には奉納者と儀式執行者を分けるだけ十分な数の有力信徒層を欠いていたのであろう。

奉納目的を示す pro salute によって導かれる句は、タウロボリウムの場合は魂の救済よりも、形式的儀礼的な祈願を示すものとされる。[8] 初期ミトラス教では pro salute 形式は二つの場合に用いられている。第一は一七二年の地方自治体の安寧のための奉納である。これはミトラス神の社会正義の保護者としてのきわめて古い神性に発しているかも知れない。[9] 第二はコモドゥス帝のための奉納に用いられた場合である（五件）。これはこの皇帝がミトラス教に入信した事実と関係がある。当時のミトラス教徒の中でも、最高の人物の一人であったにちがいない「父」にして antistes の C. ヴァレリウス・ヘラクレス[10]がオスティアの皇帝離宮にミトラス神殿をかまえ（一九〇年頃）、皇帝の解放奴隷マルクス・アウレリウス・エウプレペスがミトラス教徒として、ローマで少くとも一八四年から一九四年までの一〇年間活動を続けて

いた。地方でも皇帝のための pro salute 形式の奉納が行われ、又上述のように、軍団上層部がミトラス神の信仰に入った。

このような情勢によって初期ミトラス教を個人宗教又は救済宗教ではなかった、としてよいかどうかには疑問がある。教勢拡大や国教化と宗教の性格とは一応別物である。

さて、次にこれ等の碑文に現われた初期ミトラス教徒の神観念を調べよう。第一に、奉納は「神のお告げ」によって行われたことを示す例が三つある（一五七、一八〇、c. 一九〇年）。神命は、奴隷身分出身のフェリックスにも、コモドゥス帝の身近にあったと考えられる「父」にして antistes のヘラクレスや皇帝の解放奴隷エウプレペスにも下された。このような表現の背景に、真実の宗教体験があったのか、奉納の単なる動機づけなのかはにわかに断定出来ない。しかし、初期の数少いミトラス教伝導者たちが、ミトラス神との何等かの特殊な精神的結びつきを感じて活動していたことは認めてもよいであろう。

他方、彼等が排他的一神教徒でなかったこともたしかである。即ち、一五五年頃のメリダのミトラス教社会では、ヘルメス、サラピス、ウェヌス、アェスクラピウスなどの彫像が奉納物として収められていた。[11] 又、一六〇年代のオスティアのミトラス神殿にも、ルナ、マルス、サトゥルヌス、ユピテルなどの像があった。信者たちはこのような奉納をいかに理解していたのであろうか？メリダの場合は、ヘディクルス自身の碑文[12]がある。それによると、ヘルメス神像はミトラス神への奉納物にすぎない。多分、その他の有力な神々の像も同じように理解されていたのであろう。このような現象は古代の宗教世界においては決して不思議なことではなかった。[13] しかし、ヘディクルスのような有力な信徒がこのような奉納を行った場合は、意識的なシンクレティズムとも評価しうるであろう。他の諸々の大神たちの属性をミトラス神に吸収させる努力が行われていたのであろう。しかし、これとは全く異るミトラス教徒の宗教活動も碑文によって知ることが出来る。

アプールムのミトラス神殿を一八〇年代前半に復興した第一三軍団の司令長官 C. カエレッリウス・サビヌスは、「不滅の太陽神」の名の下にミトラス神を崇拝していたが、[14] 彼は高級軍人であり、ヘディクルスのような宗教家としての意識は持ってはいなかったと思われる。彼には意識的なシンクレティズムの意図はなかったが、一方では他の神々にも他の碑文によって奉納を行ったことが分っている。例えば、至高至善のユピテル、[15] ポプロニアの祖国の女神、女王ユノ、[16] ユピテルの顧問会議にあずかるミネルヴァ、[17] リベル・パテルとリベラなどである。[18] 最後の場合は、pro salute 形式によるコモドゥス帝のための奉納である、従って、聖職者や指導者の中にはシンクレティズムによってミトラスの一神教を保とうとする努力も行われたが、一般の信者の精神状態は必らずしもミトラス神専一ではなかった。ミトラス神をめぐる強固な信者組織や神観念はあったが、排他的な宗教団体ではなかったと云えよう。

神殿の建築も、初期ミトラス教時代に完成した。一八三年から一八五年にかけてのランバエシスのバシリカ式神殿の建立はそれを示している。又、一八三年の神殿内調度品の奉納、一六〇年代における壁画の出現も同様である。しかし、これ等はミトラス教信仰の漸進的完成を意味するものではない。すでに一五〇年代に、獅子頭神像、岩から生れるミトラス神像、オケアヌス神像、聖餐式図など、ミトラス教の主要な思想を示す図像が存在した。勿論、牛を屠る神としてのミトラス神の図像も存在したことは、松明奉持者像の出土によって明らかである。要するに、ミトラス神の信仰は二世紀中葉から、「父」と antists—sacerdos 聖職者の指導の下に、東方系民間人を主要な信者として、すでに確立した教義体系、神殿形式と図像、儀式をともなって全ローマ帝国に急速に流布した。その中心は、ローマ、ネルサエ、メリダ、そして多分オスティアなどの一部の都市にあった。それが政治社会に関係するのは、文献史料によっても知られるように、コモドゥス帝の治世になってからである。そのような帝権と宗教の結合は、ミトラス教が排他的な一神教ではなく、シンクレティズムによる一神教であったために、何等の困難もなしに行われた、といえよう。

### 3. コモドウス帝の宗教

コモドウス帝時代にミトラス教の側にはこのような変化が起ったが、それと皇帝の宗教政策との関係はどうであったか。まず、コモドウス帝の治世の数年間には、普通の一世紀間以上の宗教的転換があった、と評価されていることに注目する必要がある。[19]

コモドウス帝の治世は、父マルクス・アウレリウスの時代よりも、属州の平和は強化され、蛮族の侵入も有能な将軍たちのおかげでくいとめられていた。[20] しかし、父と異り属州の管理運営は殆んど人手にゆだねたため、地方の独立的傾向、イタリアに対する平等化が進行し、「至るところで軍隊と住民とが結びつき、地方の独自性は両者から同じように進んで行った」。[21] この現象は宗教の面にもあらわれ、ダキアでは土地の神が軍営でまつられ、ケルト人の神がヘラクレスと同一視された皇帝と再び同一視された。[22]

他方、皇帝とその周辺でも前例のない神権政治が組織化されつゝあった。コモドゥスは即位後すぐに、権力と民衆を直結する努力を露骨に示し、絶大な人気を獲得した。そのため、貴族階級が陰謀を企てた（一八二年）が、それはかえって親衛隊長や一部の廷臣に頼る傾向をつよめた。[23] 皇帝はトラヤヌス以来のアントニヌス朝の守護神ヘラクレスに対する信仰をとりあげ、皇帝個人の権威はそのヘラクレス的力の行使にあると考え、自ら超越的存在であることを示す儀式を執行した。特に、アッシリアやペルシアの王たちのように、ライオンとの儀式的格斗を行うことを好み、最後には、剣斗士の訓練をうけ（Herodianus, I, XV, 8）、ヘラクレスのように棍棒をもち、ライオンの毛皮をまとって人々に供犠を求め（SHA, Commodus, IX, 1）、コモドウスの名を廃し、ゼウスの子ヘラクレスと称し、射手としての自分の像を元老院の前に据えつけさせ（Herodianus, I, XV, 8）、パルティア人の射手の中でも最も熟練した人々を召しかかえて、斗技場で弓をひいた（ibid., I, XV, 1-3）。これ等の行為は帝国に繁栄と勝利をもたらす原動力とされ、黄金時代の回帰が宣言された。[24]

現実の政治は東方出身の雑多な宗教の信者たちにまかされた。まず、一八二年から一八五年までは Perennis が宮廷の実権を握り、皇帝は三〇〇人の美女と三〇〇人の美少年にとり囲まれて暮した（SHA, Commodus, V, 7ff.; Herodianus, I, viii, 1ff.）。一八五年宮廷革命の結果、フリュギア人の奴隷身分出身者 Cleander が登場した（SHA, ibid., VI, 3-VII, 1; Herodianus, I, xii, 1ff.）が、この人物が疫病流行、食料欠乏、騒乱状態のために失脚した後、一九〇年、エジプト人 Eclectus, O. Aemilius Laetus, Marcia の三人組[25]が登場し、遂に一九二年一二月三一日に皇帝自身が彼等によって暗殺されることになった。これ等の廷臣たちが宗教的にどのような立場にあったかは分らないが、前章に示した如く、皇帝の周辺や西方属州の東方系神殿の幹部には東方系の人物が盛んに沼動していたので、以下に述べるような、皇帝の宗教的「成長」に対して何等かの役割を演じていたことが想像される。Beaujeu によると、[26] コモドゥスの宗教には二つの転換期が考えられる。第一回目は一八五年から一八六年にかけてゞ、この時期にヘラクレスに対する特別の信仰が高まり、同時に皇帝の神格化が明白な傾向を示す。とりわけ、Jupiter Exsuperatorius（Exsuperantissimus）の信仰が皇帝に受容された。第二の時期は一八九年から皇帝の死の年一九二年までで、この間に、前例のないローマ皇帝権力の神格化が行われた。皇帝は、オリエントの大神 Sarapis, Isis, Cybele などの顕現とされ、一年の各月には皇帝の名前がつけられ、世界の中心ローマもコモドゥス帝記念植民市と改称され、時間と空間のすべては皇帝の支配下にあることが示された。[27] この背後には、オリエント系宗教に関する、二つの動向がある。一つは、コモドゥスがこれ等に好んで入信した事実である。[28] 彼はエジプトのイシスや小アジアのコマナの戦の女神 Ma Bellona の宗門に入信した（SHA, Commodus, IX, 4）。又、ミトラス教には、上述のオスティアの碑文が示す通り、宮廷内に礼拝の場を提供した形跡がある上、[29]「ミトラス神の儀式では、恐怖の見本として何かを云ったり、よそおったりするだけが習いであったのに、彼は本物の殺人でミトラス神の儀式をけがした。[30]」（SHA, Commodus, IX, 6）他方、Jupiter Exsuperatorius の信仰はシリアのパルミラ

市を中心に発達した Baal-shamin 神の神観念[31]をうけて、ローマ帝国にシリア独特の至高神（Zeus Hypsistos）[32]を教えた。この神は二世紀中期即ち、ミトラス教がはじめて西方に流布されつゝあったのと時を同じくして受容されたが、その高度な神観念をもってしてはじめて、哲学的思索と宗教とが神の問題で一致することが出来るようになり、他の神々をヒエラルキアの中に組み込む一方、普遍的神学形成の可能性が生れた[33]。神格化された皇帝は恐らくこの神と地上の仲介者であり、哲学と東方宗教が共に求める敬神の念の体現者であることを目ざしていたろう。しかし、実際には皇帝の力によっても、彼をとり囲む東方系廷臣たちによっても、各宗派を解体統一し、一つの神政体制をつくり出すことは出来なかった。史料上、当時いかなる宗教制度上の改革も行われた形跡がないし、儀式にも新しいものは導入されなかった[34]。むしろミトラス教を含む各宗派はそのまゝの形で、至高神の下にある帝権に従い[35]、信者たちはその線にそって、皇帝の治世の平安を祈願したのであろう。

このような当時の宗教的状況はミトラス教の碑文史料の示すところとよく一致している。ミトラス教は皇帝の周辺における東方系宗教に対する好意によって、首都において「父」を中心に確固たる組織づくりに成功し、同時に高級軍人や知識階級にも信者を獲得したのである。

4. パルミラ・ドゥラ・ローマ軍

ローマ帝国に Jupiter Exsuperatorius（＝Zeus Hypsistos）の信仰が流布したのは、上述の通り、二世紀中葉以後のことであったが、その本地とも云うべき Baal-shamin 神信仰の当時の本場パルミラでは、一世紀からその信仰が盛大であった。更に、一〇三年以後になると、この神名も他の多くの神名も姿を消し、専ら「御名の知られざる神」が少くとも二六八年まで崇拝されたことが分っている。その称号から推定して、この一神教的神格は Baal-shamin 神のことであったと考えられる[36]。従って、一六八年ころドゥラ・エウロポスで密儀の神ミトラスに奉納を行ったパルミラ人たちも、この

ような至高神の観念を心に抱いていたことであろう。これ等のパルミラ人ミトラス教徒がローマ帝国に Jupiter Exsuperatorius の神観念をもたらしたと云う証拠はないが、彼等がそれを知っていたということ自体、コモドゥス帝治下の宗教的状況に適応出来る資格をはじめから持っていた、といえよう。又、もしも、彼等がミトラス教の形成自体に重要な寄与をなしたとすれば、ミトラス教は最初から至高の神的存在の下における密儀による救済という構造をもっていたことが推定されよう。

では、彼等は具体的にはドゥラ・エウロポスとどのような関係にあり、ローマ軍とはどのような関係にあったのであろうか。(37)

前四一年に、パルミラが文献史料にはじめて出る (Appian, BC, V, 9) が、その時はアントニウスがこのオアシスに攻撃をしかけて来た。パルミラ人たちは、すぐに財産をまとめラクダでメソポタミアに逃げた。従って、この頃のパルミラ人の富の蓄積は大したものではなく、又、都市としての外敵に対する抵抗力も大きくなかったことがわかる。但し、彼等はすでに射手からなる隊商ルートの警備隊をもっており、ユーフラテス川流域をパトロールしていたことが分る (cf. Str., XVI, x, 20)。弓術にたけた騎馬隊こそはドゥラ・エウロポスのミトラス教徒に受けつがれていた伝統である。そのモデルはパルティアの騎兵軍であった。

次に、プリニウスの博物誌 (V, xxi, 88) の七七年の記事によると、パルミラは「ローマとパルティアという二つの強大な帝国の間で、独自の運命に従い、両帝国の最近の紛争に際しては、常に両方の側の注意をひきつけて来た。」これを完全な独立を保っていたと見るべきか、両帝国の間の他の緩衝国と同じように、一種の臣従国の立場にあったと解釈したらよいか、については問題がある。いずれにしても、軍事的にはパルミラ人射手の騎兵部隊がシリア砂漠を支配していたであろう。彼等は従って最もプライドが高く、土着系の伝統を最もよく保持していたであろう。一一七年のトラヤヌス帝の

メソポタミア遠征では、パルミラは明らかに一時ローマに併合されている。Cumont はハドリアヌス帝以後、パルミラ市にはローマの守備隊が配置され、行政はその司令官と原住民の貴族階級からなる元老院とが受持ったが、射手の騎兵隊の独立的傾向は強かった、とした。ハドリアヌス帝は多分、オリエントのステップ地帯から侵入してくる遊牧系蛮族に対抗するめたに、騎行弓兵隊を採用したが[38]、これはパルミラ系のものであったろう。パルミラの部隊の指揮官は一九八年、二二五年の碑文に現われる。後者は、ユーフラテス川沿いの Ana と Gamara の砦に駐在していた。Cumont は三世紀初期まではこの土民軍は独立を保ち、その後ようやくローマ軍に編入された、と考えた。即ち、それが cohortes Palmyrenorum であり、その第二〇部隊はドゥラ・エウロポスやその南の町 Eddana や Biblad にも駐留していた。一三二年には Hirta と Ana にナバテア系アラブの騎兵隊がいたので、cohortes Palmyrenorum は Rostovtzeff の考えるようにアラブ系の隊員を中心としたかも知れない。これは、ドゥラ・エウロポスの初期ミトラス神殿のナバテア的要素に照応している[39]。

さて、このようなパルミラ土民軍を中心としたパルミラ史とドゥラ・エウロポス史とはどのような関係にあるのか。Cumont によると、前四一年にパルミラ人はすでにここパルチア領内の町に来ていた。三一年、六一年にはアルテミス神殿にパルミラ人が奉納を行ったし、七五年にはパルミラ人が自身の神々に神殿をもっていた。ドゥラのパルミラ系宗教美術はこのころから始まるのであろう。その後、トラヤヌス帝の治世に一時、ローマ領化するのは、パルミラの場合と同じであるが、すぐにパルチア領内にもどり、一三六年の碑文には、町の貴族階級に属する守護職（Epistates）が存在し、パルチア帝国の臣従国であった。実際、二世紀初頭のローマ領化が町の文化に殆んど影響を残していないことは、碑文に二世紀中期以前にはラテン語の人名が全く出ないことでも分る[40]。

一六二年にはパルティア王 Vologaeses 三世がシリアに侵入し、ローマ側はこれに対し、皇帝マルクス・アウレリウ

スの義兄弟ルキウス・ヴェルスを派遣し、ここに一六三年から一六六年にかけてのパルティア戦争が始まった（SHA, Verus, VII et passim）。彼はバビロン、メディア、アルメニアを奪い、一六六年までにオスロエネなどの小王国を保護領化し、一六五／六年には一度はパルティア王の離宮があったクテシフォンに到った。しかし、この戦勝の真の立役者は、S. Priscus や M. Verus のような将軍たち、とりわけ、シリアのキュレスティケで生れ、オリエントの人々に圧倒的人気を保っていた A. カッシウスであった（SHA, Cassius, VI, 7）。彼は激情家であったが、同時に有能な統卒者であった上[41]（SHA, Cassius, III, 4; VI, 1-5）、一七五年には帝位を僭称した。一六五年にドゥラ・エウロポスの城下でパルティア軍を撃破したのも彼であった。

カッシウスは残忍なまでに軍規にやかましかったといわれているので、ローマ兵が新しい密儀宗教に入信することは不可能であったろう。とりわけ、一六八年までに確立していたドゥラのミトラス教社会はパルミラ土民軍の隊員から成り、上述のように、パルティア軍を模範として編成されていたので、ローマ兵との間には宗教的にも一線をひかれていた。このことは初期ミトラス神殿は非ローマ的なものであり、パルミラ土着民の伝統に忠実なパルミラ人の兵士の中に生きていたが、彼等はローマ兵からではなく、シリア人の同僚からミトラス教の密儀を学びとったのであろう。ドゥラ出土の年代不詳のユニークなパルティア語碑文[42]「牛を屠る神ミトラのもの」（MTRY GW-MTTN）も、ミトラス教がパルティア世界に深く根づいていたものであることを示している。

## 5. 初期ミトラス教史におけるドゥラ・エウロポスのミトラス教社会の位置

ドゥラ・エウロポスの初期ミトラス神殿時代のローマ帝国のミトラス教史料をみると、すでに二世紀後半の五〇年間に、ミトラス教の主要な信仰内容と組織が出来上ったし、コモドゥス帝の治世に彼独自の東方的神政の中に位置ずけられるに至った。そこに至るミトラス教の教勢拡大の担い手はオリエント系の民間人であった。彼等は元来奴隷又はそれに準

じる階層（商人など）であったが、西方で財産を築き、或は解放され、専制政治の体制に組み込まれたのである。それを更にさかのぼると、現在までに発掘されたもので、かつ東方唯一の実例であるドゥラ・エウロポスのミトラス神殿の成立の事情に行きつく。即ち、その初期の担い手はパルミラ人の隊商交易の世界を支えていたアラブ系パルミラ人の騎馬の射手たちであり、彼等の背後にはパルティア文化が存在した。(43)

では、初期ミトラス教の上記のような特性はドゥラの初期ミトラス神殿の史料にいかに現われているのであろうか。この神殿の発掘結果から見て、すでにその歴史の最初から宗教建築としての形式が定まっていたこと、従ってそこで行われる儀式が定まっていたことは確実である。又、大小二つの彩色レリーフの内容から信仰内容もすでに確立していたことが分る。しかし、レリーフ付の二つの碑文を除くと、この時期に属する碑文は他にない。そのため、信者の組織について知ることが出来ない。又、中期以後の特色ある壁画、特に「狩をするミトラス神」と「二人のマゴス神官」は初期にまでさかのぼらせることが出来ない。儀式的狩猟、マゴス神官、壁画のパルミラ的技法の由来はどこに求めるべきであろうか。又、それと、初期ミトラス神殿のパルミラ的、土着的要素といかなる関係にあるのであろうか。すでに述べたように、(44)中期神殿の建立者騎兵分遣隊長ヴァレンティヌス等の軍団所属のミトラス教徒は実は、パルミラ系の射手であった可能性がある。そうとすれば、前一世紀以来の文化的軍事的伝統をもつ彼等が、ドゥラ・エウロポスにおいてのみ看取される独自の図像や組織を残存させていたのであろう。ローマ軍といえども、この地では彼等の宗教のペルシァ的要素をぬぐい去ることが出来なかった。このように考えるならば、中期神殿の史料のうち、東方的図像（狩をする神とマゴス神官）や東方的組織（講社とマゴス神官）は史料的には初期神殿に欠けていても、パルミラ系の信徒たちと共に初期神殿時代にまでさかのぼるとしてよかろう。

さて、以上のような観点から、ドゥラ・エウロポスの史料のうち二つの実例、即ち、信徒団体の形成とマゴス神官につ

いて触れてみたい。ミトラス教の信者組織は聖職者（antistes, sacerdos）と七つの位階（下から、鴉、花嫁、兵士、獅子、ペルシア人、太陽の使者、父）、及びこれ等に属さない一般信徒から成っていたと思われるが、ドゥラには信徒全体を挙げた碑文がある。即ち、中期神殿、恐らくはカラカラ帝時代の刻線碑文（ギリシァ語）に、「神の御前に誓約をたてたすべての者たち万才」[45]というのがある。万才（nama）はペルシァ語起源とされる聖句の冒頭の慣用語であり、サンスクリット語の南無に当る。それは、ドゥラ・エウロポスの他の多くの碑文（ミトラス教以外）に現われて、同じ役割を演ずる「永からんことを」（mnēsthē, ギリシァ語）に相当すると云われている。[46] ここで注目すべきことは前一世紀から次の世紀にかけて、東方で発生しつゝあった密儀宗教の碑文でもこのような形式が用いられていたことである。サマリアのヘロデ大王時代の刻線碑文に、「神慮に通じた教師マルティアリスの彼の一門全員がコレー女神の名の下に永からんことを」祈念したものがあるが、[47] この碑文の mnēsthē と神の名を導びく parà、及び信徒一同を挙げていることなどは、ドゥラのミトラス神殿の碑文と共通の様式である、といえよう。後述のように、サマリアの教師（katēgētēs）はマゴス神官と同じ宗教的意味を有する教祖であったと考えられる。このような信徒集団は聖なる場所やその他の建造物の中で、イエスとその弟子たちの場合と同じように共同食卓という古代に多く見られる饗宴の一形式を執行した。ドゥラのミトラス教徒の場合は、そのために必要な品物と価格を記した碑文が[48]二つ残っている。その一つには、「ブドウ酒、？デナリ・肉、？デナリ・油、？デナリ・木片、二デナリ・赤カブ、五セステルケス（又はアサリア）・紙、二セステルケス（又はアサリア）・ランプの芯・五セステルケス（又はアサリア）」と書かれ、もう一つには「肉、一九デナリ・ソース、一デナリ・紙、一？・水、一デナリ・木片、一デナリ・ブドウ酒、二八デナリ、一一アサリア・合計五一デナリ、一一アサリア」とある。このようなタイプの饗宴はドゥラばかりでなく、パルミラやペトラの碑文や壁画で早くから記録されており、人々は血縁集団を中心とする墓前祭や同信のものによる特定の祭儀のために同信団体（tiasos, marzeah）を結成し、しばしば饗宴を

もよおした。ドゥラ・エウロポスにおいても、すでに一世紀にパルミラ人の同信団体名簿の碑文が存在している。[49] 初期ミトラス神殿のレリーフに見られる奉納者やその血縁者が描かれるという特色も、この同信団体の制度を背景にしてはじめて理解されるものであろう。レリーフに奉納者が現われるという点については、Cumont がそれとパルミラのレリーフとの類似を指摘している。[50]

では、このような同信団体に神学と組織を与えミトラス教を成立させたのは誰であったのであろうか。F. Will[51] は、ドゥラの碑文に何回も[52]現われる magos, magoi について、これを単に地理的な特色と看做し、ローマ人は反ペルシァ的感情からマゴス神官の支配するミトラス教を嫌った、と主張した。しかし、ローマ化以前のミトラス教がパルミラ人の土民軍の中に存在し、その伝統が中期ミトラス神殿にまで及んでいたとすれば、初期ミトラス神殿のパルミラ的ミトラス教の中で、マゴス神官がどのような意義をもっていたかについて考えてみることも無意味ではないであろう。

ドゥラの初期ミトラス神殿については、信徒の位階も聖職者も知られていない。中期ミトラス神殿からは「太陽の使者」以外の全位階及びその派生語で表わされるその他の全位階[53]、archiereus と hiereus という聖職者がそれぞれ一回[54]づつ現われる。他の場所で知られるギリシァ語の聖職者名の用法[55]を見ると、hiereus と pater とが同一人に用いられているので、hiereus はラテン語の antistes に相当するのであろう。Archiereus の方は他に例もなく、対比すべき実例にもとぼしいが、上述のサマリアのコレー女神の密儀にはこの称号をもった人物カルプルニウスが出る。[56] 彼は、一五〇年頃復興されたこの密儀の指導者であったと思われる。従ってドゥラ・エウロポスの archiereus は古代シリアの密儀宗教の中で広く使われていた聖職位の名前に連っているといえるであろう。

ドゥラ・エウロポスのミトラス教徒の称号で最も特色があるのは、上述の通り、magos 即ち、ペルシアのマゴス神官である。ヘレニスティク・ローマ時代のマゴスは魔術師・呪術師と考えられることが多いが、それは必らずしも適当でな

く、サマリアのシモン・マゴスに見られるように、[57] 密儀的宗教団体のリーダー又は教祖である場合があった。このことは Dio Chrysostomus が一〇一年に Borystheues において行った講演（Or. XXXVI, 41）の中で明確にしている。彼によれば、マゴス神官とは「神的な力をやしない育てる道を知る者」であり、奇蹟を行う者、予言してあるく者などと考えるギリシャ人は無知なのである。

ドウラの中期ミトラス神殿からは二種のマゴス神官に関する碑文が出土した。一つは「マゴス神官マクシムス万才」[58] に代表されるマゴス神官に対する讃嘆を示す一群の短い碑文であり、マゴス神官は時には複数形で現われる。この当時はギリシャ語の双数形は失われていたので、複数形の場合は二人又はそれ以上のマゴス神官を指しているのであろう。未刊行の史料が多いため断定は出来ないが、恐らく個有名詞を持つ例はマクシムス以外には極めて稀ではないかと思われる。第二は一典礼歌の一節と思われるもので、「火性の気息、それはマゴス神官たちにとっては又聖者たちの沐浴となろう」[59] と訳される。気息（asthma）とマゴス神官たちとは、既に引用した Dio Chrysostomus の講演（XXXVI）の中にも姿を現わす。即ち、当時（一〇〇年頃）マゴス神官たちによって祕密の儀式によって唱えられる典礼歌があった（三九）。それはゾロアスターに由来する（四〇）。その歌は難解であった（四三）。それによると、世界は四つの戦車で動く。至高天の戦車は火を表わし、以下気、水、地を表わす。「多くの流転を経るうちに長い時の間が過ぎ去るや、最初のものの強力な気息（iskhyron asthma）が上から落ちかかって来て」世界は大火災の巷となる。こうして世界は法に従って亡び、再び法に従って復元する（四八―五〇）。しかし、最後に四つの戦車が融合し、一つの魂魄になって、無限の時にも終りが来る（五一―五三）。マゴス神官とは恐らく、世界の定期的大火災を沐浴と観じ、それを法に従って生きのびる法の体現者のことを意味するのであろう。Dio がこの文章を書いた当時はミトラス教の史料の年代からみて、まだ密儀宗教成立以前のことであり、マゴス神官たちの祕密の儀式もペルシャ帝国時代に小アジアやシリアに入植した聖職者[60] たちの伝えたもの

であったろう。しかし、パルミラ人の活動していたシリア中央部の隊商世界にもこのような世界観をいだいたマゴス神官たちが運動していて、そこにミトラス教の組織が形成された時、重要な役割、恐らくは教祖としての役割を演じ、聖なる典礼歌を伝えた可能性は否定出来ない。

このようなマゴス神官は、中期ミトラス神殿の祭壇中央の大壁龕の両そでに描かれた二人の聖者像[61]によって表わされている。彼等はパルミラ風又はペルシァ風の上衣をまとい、フリュギア帽をかぶり、立派なひげをたくわえ、異国風の顔立ちをしている。そして、左手に白い巻物を、右手には黒い杖を持つ。ドゥラの発掘者は Hegemonius を引用して、マニ教教祖マニの姿と比較した。そして、彼等はミトラス教の聖書の著者又は解釈者であろうと考えた[62]。ドゥラの宗教絵画における教祖的人物の強調は同時代のシナゴーグの壁画において、モーセの教祖としての出現にも看取される[63]。

従って、ドゥラの碑文のマゴス神官には教祖としての意味が含まれていたと推測しうる。そして、少くともその一人はマクシムスであったろう。彼等は二世紀に極めて高い神観念に到達していたパルミラ人に、ペルシァの世界観と救済観にもとずいた密儀宗教を啓示し、同信団体を組織した。そして、その宗教はシリア人の交易ルートに乗って二世紀中葉にはイタリアやスペインや辺境の軍団駐屯地にひろがったのであろう。ドゥラのミトラス神殿の発掘者たちは、一方では、ドゥラのミトラス教は「狩をする神ミトラス」の像について述べられているように[64]、ペルシァから小アジアを通り、そこから分れて南下した一分子のミトラス教であると主張する。これは Cumont や Frothingham の考え方であるが、他方では「パルミラ人はトラヤヌス帝やハドリアヌス帝の後になってからも、パルチア人の生活と宗教に反映した古代ペルシァの伝統をよく知っていたことを忘れてはならない。彼等はミトラス人神とはシリア人の兵士や商人を通じて知りあいになったかも知れないが、どうみても彼等はミトラス神の起源とパルチア人の宗教的役割について知っていたのである」と述べている[65]。上記の諸考察によって、この考え方を更にすゝめて、ミトラス神信仰は小アジアを経ずに直接シリアに来り、

その地でマゴス神官たちの手によって密儀宗教として形成された、としても大過ないであろう。

註

（1）史学、Vol.44, No.2. 及び Vol.44, No.4.

（2）史学、Vol.44, No.4, pp.92f., n.2.

（3）インディアナ大学 G. Downey 教授からの知らせ（一九七二年一月二四日付）では、ドゥラ・エウロポス掘調査報告書を取扱う委員会が最近、長大な報告書について、イエール大学当局に勧告を行った。その結果、C.B. Wlles の死後空席になっていた総監修者を新たに任命することになった。ミトラス神殿については、最終報告書を作成するため有能な学者を選定中とのことである。他方、星野陽助教授の御好意で閲覧することが出来た *Mithras: Bulletin of thn Society for Mithraic Studies, Vol.1:1* 一九七二によると、この新しい雑誌の編集者は、一九七一年七月一三日から二〇日までイギリスの Manchester で開催された第一回国際ミトラス教研究会（オリエント、Vol.XIV, No.2, 1971, p. 163-167 参照）において、ドゥラ・エウロポスのミトラス教について研究発表を行ったイエール大学の E.D. Francis 博士である。又、イエール大学のドゥラ・エウロポス関係収蔵品の責任者の発表によると、「フランツ・キュモンの最後の、しかしこれまで未刊行の原稿の全文英訳が序文と二つの付録をつけ加えられて、同上研究会の紀要に収められるために、担当者 J. Hinnels に寄託された。」恐らく、近い将来、ドゥラ・エウロホスのミトラス教ばかりでなく、ミトラス教の起源の問題にも決定的進歩があるであろう。

（4）勿論、一たん十分な組織が成立し、各地に根づいた状態にある宗教に、地域的特色が生れるのは当然である。しかし、生れて間もない宗教を地域的特色の面から捉えることには疑問がある。

（5）Cf. F Cumont, The Mysteries of Mithra, 1956, pp.46-51.

（6）R. Duthoy. the Taurobolium, its Evolution and Terminology, 1969. 史評、No7.,1970 pp.1-7 参照。

（7）但し、一五四又は一七七年のローマの碑文に現われる、curante Hermete conservo（史学、Vol.44, No.4, p.91, xxii）の動詞 curo は、メリダの「父」ヘディクルスの儀式執行を示す動詞でもある。前者の儀式執行者ヘルメテスは conservus と呼ばれているが、これを前稿のように、「奴隷身分の同僚」を直訳してよいかどうかには疑問がある。ミトラス教の他の史料にこの語が出ないので断定は出来ないが、共に「奉納儀式に仕える者」という意味に解した方が、ヘディクルス碑文と照応するであろう。

（8）上掲史評、p.5 参照。

(9) Cf. Cumont, op, cit., pp. 1-3.

(10) このクラクレスなる名前は、後述のコモドゥス帝の神権政治理念と関係のある名前であろう。

(11) 但し、メリダでは神殿自体は未発掘であるため、これ等の彫刻が神殿のどの時期に属したものかを考古学的に決定することに出来ない。しかし、碑文（次註参照）によって、二世紀中葉のクディクルス時代に少くともその一部はすでに奉納されていたことが分る。

(12) 史学、Vol. 44, No. 4, p. 80.

(13) cf. C. Jullian, Histoire de la Gaule, Vol, VI, p. 11-12. 及び宗教研究、Vol. 42, No. 4, 1969, pp. 104f. 参照。

(14) 史学、Vol. 44, No. 4, pp, 84f.

(15) CIL, III, 1074.

(16) CIL, III, 1075.

(17) CIL, III, 1076.

(18) CIL, III, 1094.

(19) J. Beaujeu, La religion romaime à l'apogée de l'empire I, 1955, p. 370.

(20) Cambribge Ancient History IX, pp. 384f. 勿論、ダキア（一八四年）、ブリタニア（一八四六年）、北アフリカ（一九〇年）などに叛乱があり、又ストラスブール附近に蛮族の侵入があった。

(21) Ibid., p. 386 一七八年八月から一八〇年一〇月までゲルマニアですごしたのが唯一の例外であった (SHA, Commodus, II, 5-III, 5)。



(22) 同上及び、H. M. D. Parker, A History of the Roman World from A. D. 138 to 337, 1935, p. 36.

(23) CAH, ibid., pp. 379f.

(24) Ibid., pp. 386-8.

(25) 彼等の宗教はキリスト教徒であったといわれる Marcia を除けば、具体的には知ることが出来ない。cf. Beaujeu, op. cit., p. 372.

(26) Ibid., p. 371-2.

(27) CAH, pp. 390f.

(28) Beaujeu, op. cit., p. 384.

(29) Cf. ibid., p. 385.

(30) Cf. ibid., p. 384, n. 2.

(31) 拙稿、古代末シリア宗教史研究、Ⅲ、史学、Vol. 39, No, 1, pp. 99f. 参照。

(32) Cf. F. Cumont, Oriental Religions in Roman Paganism, 1956, p. 199.

(33) Beaujeu, op. cit., p. 388.

(34) Ibid, p. 371; p. 388.

(35) CAH, op. cit., p. 388.

(36) 上出註三一の拙稿参照。

(37) 史学、Vol. 44, No. 2, pp. 6f. 参照。ここに書かれている

ことにはその後の検討の結果、必らずしも従わないことにした。なぜなら、F. Cumont の著述 (Fouilles de Doura-Europos, 1936, pp, XXXII-L; CAH, XI, 1936, pp. 859f.) の中に今もなお最も基本的な線がひかれていることが分ったからである。

(38) A. Piganiol, Histoire de Rome, 1935, p. 291.

(39) 史学上掲拙稿 (Vol. 44. No. 2), p. 15

(40) Cumont, op, cit., p. 340.

(41) 「しばしば宗教的であったが、他の時は聖事の軽蔑者……肉欲の追求者であり、又清純さを愛する人」

(42) CIMRM, II 70B=R. N. Frye, No. 199.

(43) 狩の技術はパルチア人の世界のパイディアであった。Cf. G. Widengren, Iranisch-Semitische Kultur begegnung in Parthischer Zeit 1960, S. 55.

(44) 史学、Vol. 44, No. 2, p. 16.

(45) Dura-Report, No. 848=L. A. Campbell, Mithraic Iconography and Ideology. 1971, p. 182.

(46) Dura-Report, pp. 121f. Nama は次に主格と与格を導びく二つの場合があるが、両者の間に重要な相違はないようである。

(47) 拙稿、西南アジア研究、No. 22, 1971, p. 22.

(48) Dura-Report, pp. 124f., Nos. 861; 862.

(49) J. Starchy, Syria, XXXIV, 1957, p. 367.

(50) Dura-Report, p. 100, n. 16.

(51) E. Will, Le relief culturel gréco-romain, 1955, p. 161; p. 161, n. 1.

(52) Dura-Report, p. 124. 報告書には一例のみ具体的に記されているだけで、他の多くのものは未刊行である。

(53) Dura-Report, p. 123.

(54) Ibid., 124.

(55) 小アジアのアナザルボスの hiereus kai patêr (宗教研究・上掲拙稿・p. 99; cf. E. Will, op. cit., p. 166; p. 167, n. 1)、ローマのアヴェンティヌス丘のふもとの一碑文の同じ例 (CIMRM, I, 475; cf. 568: hiereus) がある。

(56) 西南アジア研究、上掲拙稿、p. 23.

(57) 同上・pp. 26ff.

(58) Dura-Report, p. 120, No. 859.

(59) Ibid., p. 127, No. 865. この一節は前後の脈絡を欠く上、この種の文章の常として解釈がむづかしい。現在では C.-M. Edsman, Ignis Divinus, Le feu comme moyen de rajeunissememt et d'immortalité : contes, légendes, mythes et rites, 1949, p. 221 の読みと解釈が一般に認められているようである。cf. CIMRM, I, 68; II, 68; M. J. Vermaseren, Mithras, the Secret God, 1959, pp. 148; 171; 176.

(60) F. Cumont, Mysteries of Mithra, 1956, pp. 11f.

(61) Dura-Report, pp. 110f.; p. 111; p. 128.

(62) 但し、この二人をゾロアスターとその第一の弟子オスタネスとしているが、ミトラス教史料にゾロアスターは存在しない。Dio Chrysostomus のマゴス神宮の典礼歌は、上述の通り、ゾロアスターに由来するとされているが、この史料をミトラス教と直接結びつけることは出来ない。cf. AJA, XXXIX, 1935, p. 4, note; Widengren, op. cit., S. 87.

(63) M. I. Rostovtzeff, Dura-Europus and its Art, 1938, p. 108.

(64) Dura-Report, pp. 112–115.

(65) Ibid., p. 88.